

Title	完了形について : 過去完了形における「視点」を中心に
Author(s)	長谷川, 存古
Citation	Osaka Literary Review. 12 P.16-P.25
Issue Date	1973-12-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25725
DOI	10.18910/25725
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

完了形について¹

——過去完了形における「視点」を中心に——

長谷川 存 古

0. はじめに

英語の完了形の意味については、すでに多くの研究がおこなわれていることはいうまでもないが、本稿ではこれを直接とりあげることはせず、まず §1 で毛利可信 (1972)² にもとづいて過去完了形における「視点」の意義を明らかにしたい。ついで変形文法の中の「生成意味論」に属する McCawley (1971)³ を中心として、その中での Tense にかんする Semantic Representation の性質とその意義を検討し、最後に §3 で、とくに過去完了形における「視点」が McCawley (1971) でどのように取り扱われているかを見てもみることにしたい。

1. 過去完了形と「視点」

完了形 (*have*+PP) には「完了, 結果, 経験, 継続」の4種の用法が区別されるとするのが通例であるが、完了形の意味自体の検討は本稿の目的ではないので深く立ち入ることはせず、ただ「完了形の意味は本質的にはつねにある時点 (現在完了形 *Pres*+*have*+PP では発話時の『現在』, 過去完了形 *Past*+*have*+PP では過去のある時点) における『状態』⁴ を述べることである」という見方を指摘するにとどめておきたい。

ついで過去完了形 *Past*+*have*+PP に考察を絞ってみたいが、ここではなによりも「視点」について明らかにすることが必要となる。過去完了形

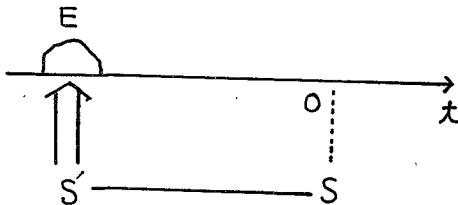
は話者が過去に一つの「視点」を定め、そこからさらに過去を眺めること
 によってはじめて成立すると考えられるからである。

まず Simple Past, たとえば

(1) I took breakfast at eight.

については、これを(2)のように、話者は発話時の「現在」をも踏まえなが
 ら、過去に一つの「視点」を定め、この「視点」(S') から対象 (E) を
 眺めつつ発されたものととらえることができる。

(2)



O = 現在の時点
 E = 事象 (朝食)
 S = 話者
 S' = 過去における話者の
 時間的位置

過去完了形

(3) He said that he *had lost* his watch.

←(3') He said, "I *have lost* my watch."

(4) He said that he *had loved* her once.

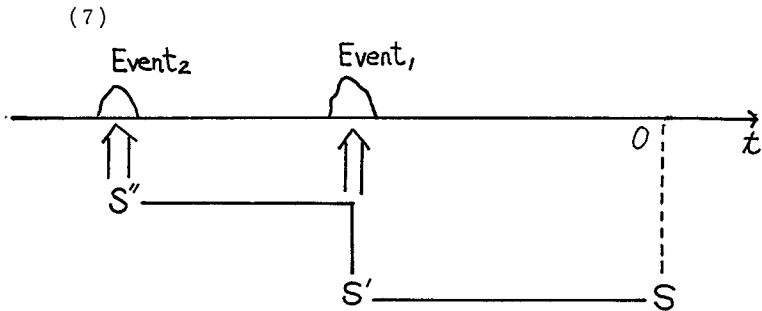
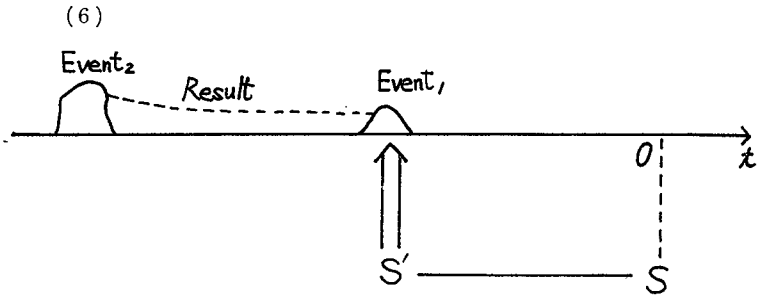
←(4') He said, "I *loved* her once."

(5) He showed me an album which he *had bought* the day before.

(いずれも毛利 (1972))

ではそれぞれ "He said," "He said," "He showed me an album," で示
 される時点に視点がセットされ、その視点から「より過去」の事象が眺め
 られている。しかしここで注意すべきは、(3)では「より過去」の事象が
 「完了形」(*have*+PP) によって表現される捉え方で捉えられているのに
 たいし、(4), (5)ではそれは、過去におかれた視点からさらに "Simple
 Past" にあたる捉え方で捉えられていることである。これを図示すればそ
 れぞれ(6), (7)のようになる。ここで(3)=(6)のような過去完了形をA型、
 (4), (5)=(7)のような過去完了形をB型と呼んで区別することができる。⁶

完了形について

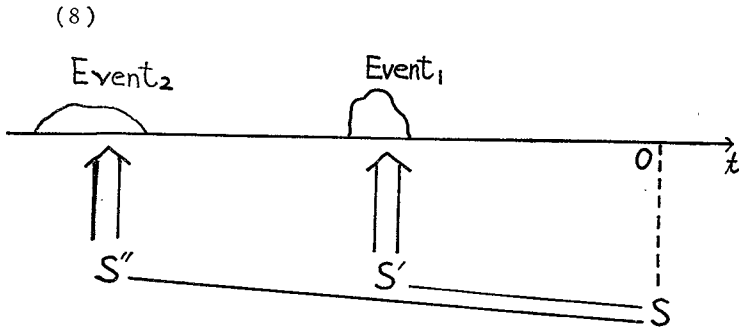


ここで注意すべきは、単に過去において時間的順序をもった二つ以上の事象について述べるからといって、それがかならず過去完了形を必要とするとは限らないことである。

(8) His mother *took* him out of school and *taught* him at home, as she *was* a teacher herself before.

では“she *had been* a teacher,”とはならず“she *was* a teacher,”となっている。(4), (5)とは異なり, “she *was* a teacher herself,”という事象は、別に“His mother *took* him out of school and *taught* him at home,”の視点から眺められているわけではないからである。これを図示すれば(7)に対して(8)のようになる。

ここで問題となるのはB型の過去完了形もやはり完了形としての一般的意味を現在完了形やA型の過去完了形と共通にもっているかという点であるが、この点についてはただ §2で「生成意味論」的変形文法がこの問題をどうあつかっているかを見るにとどめておく。



2. 「生成意味論」における完了形

つぎに、「生成意味論」的変形文法での Tense, Aspect の扱い方を, McCawley (1971) を中心に検討し, その決定的意義を見るとともに, 過去完了形について §1 で明らかにした点で, 少なくとも McCawley (1971) では捉えられていないと考えられる点を明らかにしたい。毛利 (1972) で明確にされている, 過去完了形における「視点」の意義を捉え得ないため, B型過去完了形の Semantic Representation は設定しえても, A型についてはその成立のための条件 (すなわち “Presupposition”) の把握に失敗し, 首尾一貫しないものになっていると考えられるのである。

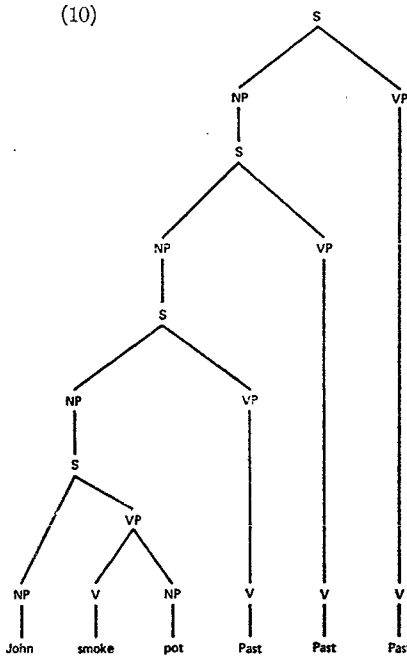
2.1. 過去完了形の ‘Deep Structure’ と変形規則

McCawley (1971) は

(9) John had been smoking pot. (pot=marijuana, 引用者注)

の Deep Structure として, (10)を示している。

ここでの “Deep Structure” は McCawley 自身の使っている term であって, もちろん変形文法の「標準理論」でのように Syntactic Component で生成されるものではないが, ⁸Semantic Representation (以下 SR と略記) とこの Deep Structure との関係はかならずしも明確にされていない。ただ少なくとも A型過去完了形のばあいには, (10)のように Tense (Pres または Past) を自動詞として embed してえられる ‘Deep Structure’ は



S Rからの変形の間段階であるとのべられている。(7)のようなB型(9)は後述するようにB型と考えられる。)のばあいは、各々のPastをそれぞれ‘Reference Point of Time’とすればただちにSRが得られると考えてよいようである。

(9)の意味については McCawley (1971) は明確には述べていないが、(10)のもっとも外側の Past によって ‘implicit reference point in the past’ が示され、その時点から見ての「経験」(McCawley によれば ‘Existential’) を示す過

去完了形であるようだ。進行形はいわゆる ‘Emotional Coloring’ のためのものようである。

理論的には(10)の自動詞 Past あるいは Pres は無限に embed されることが可能であり、これに ‘Tense Replacement Transformation’

- (11) a. Pres → ϕ
 Past → have } if subject-verb agreement has not applied.

- b. have_{AUX} → ϕ in env. have ____

がかかって、もっとも外側が Pres ならば現在完了形、Past ならば過去完了形となる。しかし現実には(12)のようにせいぜい三つの Tense が重なる程度が限界であることは McCawley (1971) 自身も認めている。

- (12) When John had married Sue, he had known Cynthia for five years.

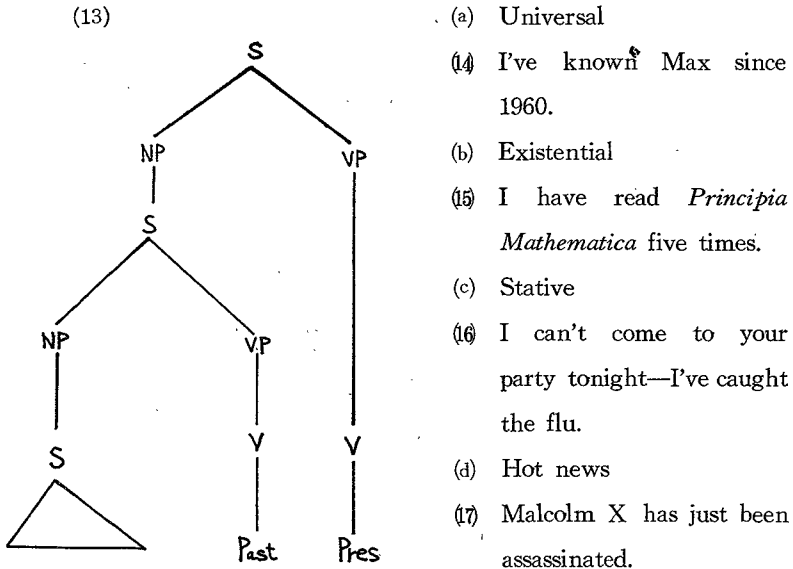
いずれにしても、このようにして英語の Tense, Aspect(もっとも進行形についてはなら触れられていないが)と Sentence との関係が、はじめ

て「表層」による制約を解かれたわけで、その意義は大きいといわねばならないであろう。Fillmore の 'Case Grammar' も同様の扱いをしている。そして、これと「時枝文法」での「入子型構造」による日本語の「た」の扱い方をあわせ見るならば、¹⁰ その間の Universality は明白であろう。

2.2 現在完了形の ¹¹ Semantic Representation

次に McCawley (1971) における 現在完了形の SR を検討しなければならないが、ここではそれを十分に行なう余裕はないので、ただ次の「過去完了形と『視点』」の問題を具体的にみるために必要な最少限の紹介をおこなっておきたいと思う。

「現在完了形」は、いずれも変形によって(13)のような同一の中間段階を生ずるとされながらも、次の4種の明確に異なった意味をもつとされている。¹²



この中で次の「過去完了形と『視点』」の問題を見る際の実例となっており、また McCawley がもっとも自信をもって提示しているのは(b)の SR なので、ここでは(b)と、それに関連した(a)のみをとりあげたい。

完了形について

(a), (b)のSRはそれぞれ Quantifier (量記号)

$$(18) \quad \forall xF(x)$$

および

$$\exists xF(x)$$

である。ただしここで McCawley (1971) は、論理学における量化が ‘unrestricted quantification’ であるのにたいし、自然言語における量化は ‘restricted quantification’ であるとする。すなわち、“All men are mortal.” は論理学では

$$(19) \quad \text{All } x (\text{Man}(x) \supset \text{Mortal}(x))$$

と表わされる命題であるのにたいして、自然言語の中では、それは

$$(20) \quad \text{All}_{x:\text{Man}(x)} \text{Mortal}(x)$$

と表わされる命題なのである。自然言語では変項の ‘range’ 自体も命題関数によって表わされるのである。そして現在完了のばあいにはこの ‘range’ はつねに「現在時」を含んでおり、それにたいして(20)での $\text{Mortal}(x)$ にあたる、range 内の変項について主張される命題関数はつねに過去にかんじたものである。¹³そして、‘range’ を示す命題関数から Present Tense が、主張される命題関数自体から Past Tense が派生され、後にこの Quantifier 自体は削除されて(19)のような構造が中間段階として現われるとされる。

3. 生成意味論における「過去完了形と『視点』」

以上のように Existential に属する現在完了形のSRを設定すれば、

(21) When John married Sue, he had read *Principia Mathematica* five times.

の ‘Deep Structure’ は(22)のようになる。

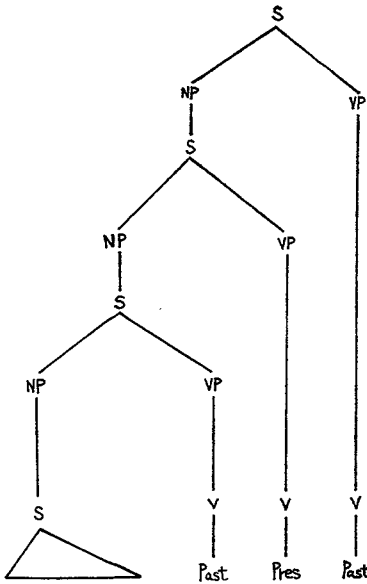
ところが論文の最後にいたって、McCawley (1971) は

(23) Henry VIII got married six times.

の例をあげ、次のようにいうのである。¹⁴

“While the analysis given above allowed in principle for presents and

(22)



pasts to be embedded in one another to one's heart's content, examples of embedded pasts were much easier to come by than were examples of embedded presents; indeed the only examples of embedded presents to be found above are the presents of embedded present perfects. Another peculiarity of the analysis given suggests that even these examples of embedded presents are spurious and that there are in fact no embedded presents. Specifically, consider the present

tense that was introduced by the "range" of a present perfect. In the case where the range of something asserting the existence of past events does not contain the present, the "range" does not contribute its own tense: a past tense is used rather than a past perfect, as in (23).¹⁵ This suggests that the rule creating the outer tense of present perfects applies only in present contexts. This in turn implies that present tense differs from past tense in more ways than it has generally been held to: it marks an absolute rather than a relative time relation."

すなわち、(23)も過去の一期間を 'range' とする 'existential' なSRをもつ点で(21)と変わらず、(23)の段階を経て過去完了形となるべきものなのに、これがなぜ(23)のように Simple Past となったのかといえば、Present Tense というものは 'absolute time relation' を示すもので、過去の一時点を基点とした Present Tense というものはありえないからだというの

である。そして，“the rule creating the outer tense of present perfects applies only in present contexts.”と結論する。しかしこれでは(21)のような ‘past context’ 中での ‘present perfect’ (総じてA型の過去完了形)の存在そのものが否定されることになりかねない。

ここにたって、(22)での外ワクの past の意味するものが何かを明らかにすることが必要であり、それが明確にされていないために、結局 McCawley (1971) は(21)が(23)と異なって過去完了形とならねばならぬ必然性をとらええなかったのではないかという疑問が浮び上がってくる。§1で、過去完了形の成立のためには過去における「視点」からより過去が眺められることが不可欠であることを見てきたわれわれにとっては、(21)と(23)の相異は明らかであり、(22)の外ワクの Past の意味も明らかである。それは、“When John married Sue,” によって示される過去の一時点にセットされた「視点」に他ならない。McCawley (1971) は(12)について、外ワクの Past の SRとしての “unmentioned reference point” にふれながら、¹⁶これを一般化して明確にすることをせず、結局、過去完了形の成立のための条件を明確にするにいたっていないといえることができる。これは過去完了形の “Presupposition” の問題として今後明らかにされてゆくべき点であろう。

このように、従来の意味論の成果の中には、なお変形文法に知られていないものがあり、これらの成果の一端をとり入れることによって、変形文法の一層の発展が可能となるのではないかと考えられる。¹⁷

なお、筆者は McCawley (1971) を検討しただけであって、それ以後の変形文法理論の中で Tense, Aspect がどのように扱われているかはまだ知らない。本稿はただ従来の意味論の成果が変形文法の一論文にどのような批判を投げかけ、それをどのように発展させようかを示すことのみを目的としたものであって、変形文法の Tense, Aspect 論そのものを対象としたものではない。

注

- (1) 本稿は 阪大英文学会第5回大会 (1972年11月2日) で行なった発表にもとづいて、さらに変形文法理論の検討へとすすまんとした試みである。
- (2) 毛利可信, 『意味論から見た英文法』(東京: 研究社, 1972)
- (3) James D. McCawley, "Tense and Time Reference in English," *Studies in Linguistic Semantics*, eds. Charles J. Fillmore and D. Terence Langendoen (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1971), pp.96—113.
- (4) 毛利 (1972), Ch. 25を見よ。
- (5) この点は毛利 (1972) Ch.22および Ch.25を見よ。
- (6) 毛利 (1972), p. 185.
- (7) 毛利可信, 『動詞の用法』下, (東京: 研究社, 1960), pp. 42—43.
- (8) 「標準理論」は Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax* (Cambridge, Mass: the M. I. T. Press, 1965) でまとめられている。
- (9) Charles J. Fillmore, "The Case for Case," *Universals in Linguistic Theory*, eds. Emmon Bach and Robert J. Harms (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1968), pp.1—88.
- (10) 時枝誠記, 『日本文法, 口語篇』(東京: 岩波書店, 1950) pp. 246—261.
- (11) ここでの「現在完了形」とは, Past の外ワクの中に embed されたものをも含む, "Deep Structure"あるいはSRにおける Pres+have+PP である。
- (12) McCawley (1971), p.104.
- (13) もっとも, (a) Universal のばあいには, かならずしもこうとはいえず, ここにもこの説の弱点はあるようだが。
- (14) McCawley (1971), p.113.
- (15) 例文の番号は本稿に合うよう直してある。
- (16) McCawley (1971), p.103.
- (17) なおこれは, McCawley (1971) がそのような「視点」の存在にまったく気がついていないということではない。彼はもちろんこの事実をよく知っており, それは論文中のいたる所に散見されるが, ただ彼の創見になる完了形のSRに固執するあまり, 図を取扱うにあたって, この文での“中継”の「視点」の不在に気がつかなかったのであり, これは過去完了形における「視点」の役割が明確に把握されていないためなのである。